



▲最後はともにパンチアウト締めで歓喜のガッツポーズ！ 藤井(左)は今季3勝目、中島は1年ぶりの優勝で、通算勝利数をそれぞれ8勝、3勝とした

全卸連プレゼンツ JPBA★SSSカップ2022 11月19・20日/東京ポートボウル

男子 藤井信人、女子 中島瑞葵 が大会初V!

コロナ禍でも中断することなく、今年で4回目を迎えた“シニアスポーツサポート”のプロアマトーナメント『全卸連プレゼンツ JPBA★SSSカップ2022』は、男子・藤井信人(52期・フリー/ハイ・スポーツ社)、女子・中島瑞葵(53期・小嶺シティボウル/ABS)がともに大会初優勝を飾った。(主催:全国化粧品日用品卸連合会/公社)日本プロボウリング協会)

西オープンがコロナ感染でブラインド。復帰後も30位→5位→14位→19位→18位→51位→14位と、まるで別人のように優勝争いから遠ざかっていた。

「この一年は長かったです。思えば、勝てない間は『ミスしたらどうしよう』と負のスパイラルに陥っていました」と中島。迷いのトンネルを抜け出すきっかけとなったのは「優勝したときのビデオを見返して、全然ダメだった時期は『投げ急いでいる』と気づいたことだ」という。

「ゆっくり歩いてしっかり投げる」ことを心がけた結果の優



▲ノミスの藤井に対し、斉藤琢(右)は3フレ③⑦⑨スプリットオープンのおと4連続のピンタップで10月の千葉オープンに続く今季2勝目はならず。「しっかり振り切る自分のボウリングができなかった結果です」

勝に、表情も自然とほころぶ。「苦手のショートゲームで優勝できたのは自信になります。シードに残れるかどうかの心配がなくなって邪念も消えたので、残りの試合はリラックスしてがんばります(笑)」

優勝ボール:ゼン・アシュラ 900GLOVAL(ABS)

藤井は三冠奪取に一步前進

一方、2位進出で今季3勝目を勝ちとった男子の藤井信人は、目標とするポイント、獲得賞金、アベレージのランキング三冠奪取にまた一步近づいた。

「左が強い会場だし、正直優勝できるとは思わなかったけど、右では一番になりたいと思っていた」と藤井。「三冠王」への最難関をアベレージ部門と定め、「一球一球大事に投げていることがプラスになっている」という。

その言葉どおり、決勝ステップラダーの2Gはいずれもノーミス。3位決定戦では小林哲也との息詰まるストライクの応酬を逆転で制し、優勝

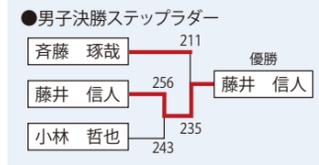
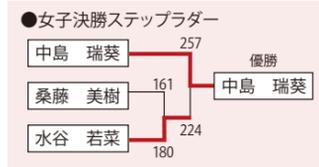
決定戦も⑦ピンタップに悩む斉藤琢哉を尻目に、まったく危なげなかった。

「打てていれば楽しいし、応援されて気持ちがいい。そういう状況を作ること意識して、一つひとつの大会を投げ切ることが大事だと思っている。強気で行くのが自分の持ち味だけど、最近はけっこう冷静な部分もあります(笑)」

優勝ボール:EXOTIC GEM ROTO GRIP



▲男女1~3位入賞者。昨年準Vの雪辱を期した桑藤(左端)は5オープンと大崩れして逆に一步後退の3位、今季TV決勝初進出の小林(右端)は7連発スタートでゲームの主導権を握ったが終盤に乱れ、藤井に逆転を許して3位に終わった



今年は競技フォーマットがマイナーチェンジされ、プロは男女とも予選6G・準々決勝3G・準決勝3Gを経て上位各3名が1Gマッチの決勝ステップラダーにて覇を競った。



▲本来のパワフルなボウリングが蘇った中島に対し、水谷(右)も中盤以降はしっかりアジャストして懸命に食らいついたが…。「もう6年なので、そろそろ優勝したいです」

迷いのトンネル抜けた中島

先に行われた女子の優勝決定戦は、男子並みのボールスピードと回転数で豪快なスプラッシュ音を響かせたトップシードの現役女子高生プロ・中島瑞葵が257のハイスコアで224の水谷若菜を破り、約1年ぶりに通算3勝目を挙げた。

デビューイヤーの昨年、女子新人戦と六甲クイーンズをたて続けに制し、その後もコンスタントに上位入賞を果たして「驚異の新人」と謳われた中島だが、2年目の今季は一転して低迷。トップシードでVを目前にした開幕戦の女子プロオールスター決勝で158のコースコアを叩いて敗れると、続く開

FOCUS UP 日本初の“IBFアスリート委員”に就任 山下知且さんが抱く夢

7月にオンラインで行われたIBF(世界ボウリング連盟)アスリート委員会の選挙で、JBCの山下知且さんがアスリート委員に選出された。意外なことに、日本からの同委員選出は今回が初めてという。

ボウリング界のために立候補

「世界選手権やアジア競技大会などの主要な国際大会、もしくはプロのトーナメントなどでの実績に加えて、ある程度の英語力があることが立候補の資格なんです。これまでその資格に該当する人がいなかったか、そういうのがあることすら知らない人が多かったと思います。私は2019年からJBCの国際部の仕事を在宅でさせてもらっていますが、IBFやABF(アジアボウリング連盟)の連絡がまず私のところに来るようになった。アスリート委員会の存在ぐらいは知っていましたが、活動実態や委員の選出方法などは、初めて知りました」

もともとボウリング界のた



▲山下さんは今秋も国体に長崎県代表として参加したほか、ジャパンオープンにも出場(総合24位)するなど、現役ボウラーとしても活躍中だ

めに役に立ちたいという思いを持っていただけで、委員になることで少しでも役に立てるのならと立候補を決意した。

「JBCからは後押しするよと言ってもらったし、国際舞台で活躍されてきた赤木恭平元会長や、フジ取手ボウルの野田博社長と話をさせてもらったときにも『日本の存在感がどんどん薄くなっているの、落選してもいいから手を上げるのが大事だよ』と、背中を押してもらいました」

アスリートの声をIBFの理事

会の決定に反映させることが最も大きな役割だ。ちなみにPBAでも活躍しているフランソワ・ラヴォア(カナダ)が委員長、オスカー・パレルマ(フィンランド)が副委員長を務めている。

「リモートで会議をやったぐらいで顔合わせはできていませんが、インターネットのメッセージツール“WhatsApp”を使って情報交換はひんぱんにやっています」

若い人のための環境づくりを

山下さんは、今も現役のトップボウラーとして活動する一方、公益財団法人長崎県スポーツ協会に勤務する。

「ボウリングだけで生活させてもらっているようなものから、プロよりもプロなんだという自負があります。今力を入れているのは、若い人たちが社会人になってもボウリングを続けられるような環境づくり、アスリートと企業のマッチングというような事業です」

今年プロデビューした今井双葉や原口優馬は、山下さんが斡旋した企業に就職、仕事をしながら選手として活動をしている。



▲IBFアジアシニア評議会の事務局長も務める山下さんは、第16回アジアシニア選手権(11月9~15日・マレーシア)に日本選手団を引率、開会式であいさつを行った

「ナショナルチームはもとより、プロも賞金だけで生活していくのは難しいのが現実です。だから彼らが企業に勤務しながら競技生活をできるモデルケースになってくれればいいと思っています。また、アスリートが将来コーチや指導者としてボウ

リングビジネスに関われるようにできないかなというのが、自分の中での大きなテーマです」

現在はIBFにもABFにも日本人の理事は不在で、国際機関との窓口は山下さんがほぼ一手に引き受けている。

「いつも責任は感じています。例えば自分の発言が日本の立場だと思われかねないので、言動には気をつけるようにしています。私は高校生のころから国際大会に参加したとき、赤木さんがすごく存在感を発揮されているのを目の当たりにしていたこともあって、自分も国際的に貢献できるような人間になりたいという気持ちがありました。大変なことも多いですが、今自分のやりたいことをさせてもらっているので楽しいし、本当に幸せだなと思います」

やました・ともかつ/1982年12月5日生まれ、長崎県出身。2000年~2011年全日本ナショナルチーム在籍。公益財団法人長崎県スポーツ協会職員。JBC国際委員会委員、長崎県連常任理事